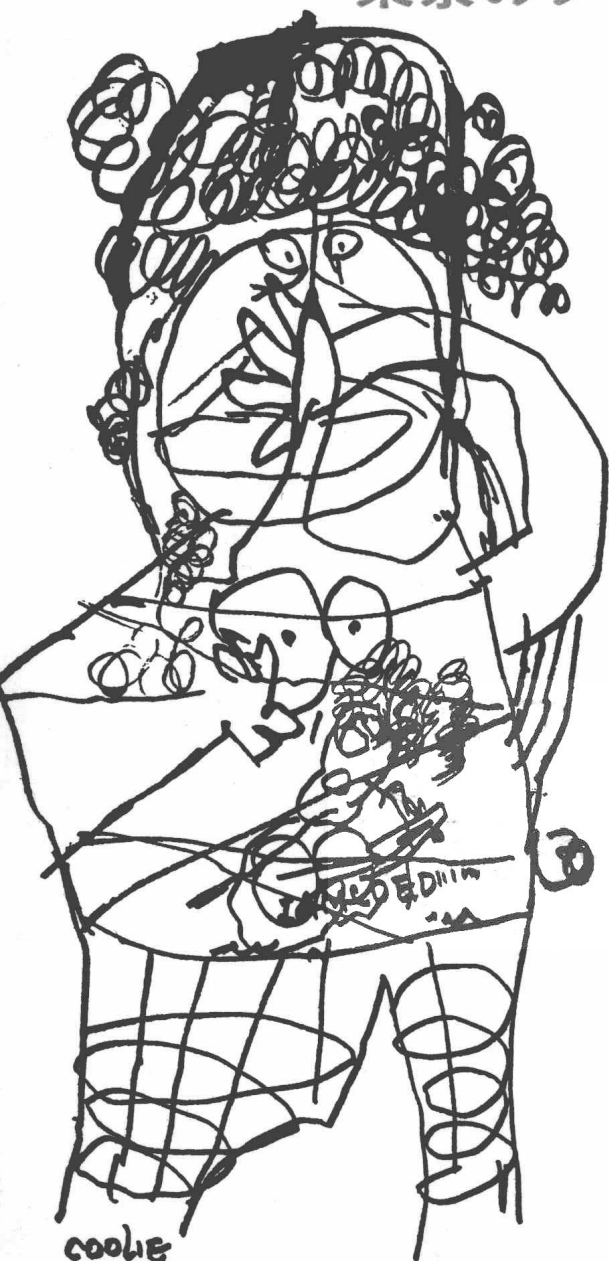




東京のプリンスたち

深沢七郎



中央公論社

検印廃止

©

東京のプリンスたち

著 者 深 沢 七 郎

昭和34年11月25日印刷

昭和34年11月30日発行

発行者 栗 本 和 夫

印 刷 大日本印刷

発行所 中 央 公 論 社

東京都中央区京橋二の一

電話(56)5921~30

振替東京34番

定価 280 円

東京のプリンスたち

一

朝鮮風小夜楽

六七

かげろう囃子

一〇三

木曾節お六

一三一

安徳山の天狗岩

一五九

三つのエチュード

月のアペニン山

一七七

南京小僧

一九八

魔法使いのスケルツォ

二〇六

東京のプリンスたち

たばこの煙りが霧のように籠っているから鳴っているジャズの音も外へ逃げないような気がして、(やっぱ、この店はいいな) と思いながら洋介はいつもの隅の場所に腰かけていた。さっきから黄色いガラス越しに外を眺めていたが田中はなかなか来ないのだ。とくにデイトしてゐる筈だから、もうここへ来る頃じゃないかと待っていたのだ。田中のデイトの相手が「もう一人、友達を連れて来る」と言つて、そのもう一人を洋介に紹介してくれることになつていた。どんな女生徒が来るのか、それが待ちどおしいのでもなかった。田中も相手とは昨日知りあつたばかりのデイトだつた。一緒に連れて来るという女のコがどんな顔をしているのか、一寸知りたいただけだ。デイトするのは好きでも嫌いでもなく唯、女のコがそばにしているとなく気が落ちつけるからだ。それより、この店で好きな唄をジャン／＼聞いている方が気持ちよかつた。ダイナミックな音が粉々になつて全身にぶつかつて来る振動はしびれるような快感だつた。息がつまるように鼓動が劇しくなつて、身体のやり場がなくなつて、手や足が小さくふるえるのだ。こんな時は、誰かそばにいれば、同じように鼓動が合つて、一人だけで聞いているよりもっと楽しいのだ。だから、(田中が早く来ればいい)と待ちどおしかつた。鳴っているレコードがマンボの「ある恋の物語」に變つた。洋介は涙が出そうになつた。マンボをきくと、なぜだか知らない悲しさが胸にこみあげて来るのだ。腹の中をかきむしられるような、苦痛に似た快感だ。マンボも好きだが、それよりエルヴィス・プレスリーの唄は手や足がこきざみにゆれて、身体中の力が出きつてしまうのだ。(次は、エルヴィスのレコードをかけてくれればいい)と洋介は思った。そ

う思っているとレコードが途中で止ってシンフォニーの「新世界」に変わってしまった。

(あいつは、しょうがねえ奴だ)

と洋介は舌打ちした。向うの隅に腰かけているあのB大の学生の注文でシンフォニーをかけたらしい。彼奴の青白い瘦せた顔、賢そうな目つき、いやに自分を大切そうに思い込んでいる表情は、女だったら「お高い」という奴だ。シンフォニーなんて(ガシャ／＼な騒音だぞ)と言いたくなった。思わせたつぶりのように出て来る音、待ちどおしい間、出て来たところが訳もわからないふし、たまに、ちよつと、いい旋律が出て来てもすぐムズカシイふしになってしまふシンフォニーを、上品そうに、待ちどおしく聞いている奴等は、勉強でもするつもりでミュージックを聞いているらしい。音楽には芸術家の思想があるなんて言うけど、ミュージックに深刻な思想など盛り込まれたら楽しくない筈だ。芸術家の思想なんて狂人のような、苦しそうな感情で、そんなミュージックは嫌いだった。あのB大の学生が来ると、いつもツマライ曲——シンフォニーや歌劇の変な作り声の唄をかけるので憂鬱だが、相手にしなければいいので(まあ、我慢していいよ)と洋介はシンフォニーの終るのを待っていた。

ドアの外がバタ／＼して田中達が入って来た。クラスの伊藤も一緒なのは思いがけなかった。うしろに女生徒が二人いた。

「どうぞ／＼」

と田中は先に入って女の子には始めだけは丁寧な言い方をして向いの席へ腰かけさせた。

「よオ、授業は？」

そう田中は聞きながら洋介のそばへ腰かけた。

「サボったよ」

と言って洋介はニヤツと笑った。それから、

「元帥の時間は嫌だから」

と言った。そうすると、仇名が元帥のあの先生の顔が目の先にちらついた。そうして、あの先生が嫌いになったことが淋しくなってきた。サボらなければならなくなることがツラくなってきたのだ。学校のことを考えたと頭に来るので洋介はバツと立ち上ってレコードの所へ行つた。鳴っているシンフォニーを止めて、すぐそこにあつたマンボの「ラ・コンパルサ」をかけた。これも悲しい曲だ。その次はエルヴィスの「デディ・ベア」をかけようとレコードを探した。学校のことを考えると、こんなに気がクシャ／＼するのは、これで、残念だけど高二で学校を止めようと思つてゐるからだ。学校をやめなければならぬ程嫌いになつてしまつたからだ。それ程、あの先生が嫌いになつてしまつたのだ。高二でやめることは心残りだし、親達も怒るだろうと思つた。だが、嫌いな先生の前^{キツ}にいることは我慢が出来ないことだから学校をやめるのも仕方がないと覚悟をきめていた。向うでは田中が女生徒と話していた。

「忘れたら、お尻がアザになる程ツネってやるから」

と、かん高い声で何か言つてゐる片足のスネに繻帯をしているのが田中の相手で、そばのもう一人――カボチャの様な頭の、色の黒い女生徒が洋介に紹介してくれるという相手だった。田中の向いで伊藤がおとなしく腰かけていた。

「N高校なんて、なんで、行つてゐるんだよ、あんな才高イ学校へ？」

と、コーヒーを飲みながらバカにするように田中が横眼を使ってスネに繻帯をしている女生徒

に聞いていた。もう、キザな言葉ではなくて荒っぽい口調になっていた。

「あら、あんただって、なんでC高なんかへ行ってるのよ、あんな、シメツばい宗教学校なんかへ」

と、アベコベに言い返している様子は活潑な、気分のいい女生徒らしかった。

「受かっちゃったんだよ、試験を受けたら、あんな学校へ」

そう言つて田中は笑つた。「デディ・ベア」のレコードが見つからないうちに「ロンサム・カウボーイ」が出て来た。これもエルヴィスのだ。（これもいい）と「ラ・コンパルサ」は三回もかけつづけていたので途中で止めて「ロンサム・カウボーイ」をかけた。

「プレスリーのばかりかけてくれよ」

と店の女のコに頼んで洋介はカボチャ頭の女生徒の横へぶつつかるように腰をかけた。

「よオ、なんて言う名だい？」

ときいたが、

「ふっふっふ」

と笑っているだけだった。名前を言わないのは（こいつは、いい家庭の娘じゃないか？）とがっかりした。いい家庭の奴は、勝手にうぬぼれて、オ高イ奴だからつまらなかった。

「言つたって、いいじゃないかよオ」

もう名前など聞きたくもなかったが洋介はときぎみに足をふるわせて、リズムに合わせてテールを叩きながら、唄を口ずさんでるように口先でしゃべっているだけだった。

「トンガラシって言うの」

とカボチャ頭は言つて笑つていた。名前などもう聞きたくなくなつてしまつたので黙つてい

と、
「佐々木つて言うのよ」

と教えてくれた。聞きたくもないのに教えてるので洋介はうるさくなった。横で伊藤が、

「帰ろうか？」

と言いだした。

「バカヤロー」

と田中が伊藤を睨んで笑つた。

「家へ帰つて、何をするんだ？」

と洋介は呆れ返つて聞いた。

「腹がへつたんだ、飯をくうんだ」

と伊藤が言つた。

「コッペ買つて来いよ」

と洋介は言つた。腹がへつたと言われて洋介は自分も腹がへつてることを思いだした。伊藤は
買いに行こうとしなかった。(金がねえんだらう)と洋介には判つていた。

「持つてるかい？」

と田中が指を丸めて聞くので田中も腹がへつてるのがよく判つた。

「二十円しかないよ、ここのコーヒー代を払うんだから」

と洋介は首をふつた。それから、

「あいつの分を払えば」

とカボチャ頭の方を指でつついた。

「俺も、百二十円しかないよ」

と田中も繙帯の女生徒の方へ顎をつきだした。コーヒー代が六十円だから、二人分かつきりしか田中は持っていないのだ。

「コッペ買って来いよ」

と洋介は大きい声をだしてテーブルの上へ二十円出した。

「なんだ、これだけか」

伊藤はそう言ったがすぐにその二十円を掴んでさっさと出て行った。

「あさって、出て来いよ」

と田中が繙帯の女生徒に言った。横で洋介は（まずいな）と思った。田中は明日も、あさってもほかの女のコとデートすることになっている筈である。そのうち、田中は自分でも気がついてらしい、

「まずいな、あしたも、あさっても」

と言った。それから、

「夕方ならいいよ」

と、口をとがらせて言った。自分で言いだして自分で（面倒だ）と思っている田中を洋介は（呑気でいいな）と思った。やはり学校をサボらないからだと思った。（俺も、元帥の時間をサボらなければ）と洋介は急に学校のことを思い出した。レコードはマンボの「キサス・キサス」

に変わっていた。エルヴィスのばかりかけてくれよと頼んでおいたけど、これもかけてくれてよかったと思った。

「6時頃ならいいよ」

と、横で田中が縋帯の女生徒に言った。きっと、4時にほかの女のコとデートしても6時には大丈夫だと思ったからだろう。

「映画見に、行かないかい？」

と洋介もカボチャ頭聞いた。それから、

「あしたはだめだし、あさってもだめだが」

とブツ／＼言った。口では言ってしまったが洋介も明日は渡辺のオートバイの尻に乗って箱根へドライブに行くことになっているし、あさっては、ほかの女のコとデートすることになっているのだ。洋介には遊ぶのに忙しいほかに元帥の時間という悩みがあるのだ。

「あしたもあさっても忙がしそうね」

とカボチャ頭が言った。だが、洋介は黙っていた。友達とロカビリーの唄を聞くのは、食事をするのと同じように、どうしてもなければ困る時間なのだ。エルヴィスの唄をきく時間が少しでも多く欲しいので映画などへは行きたくもないが「行こう」と言ってしまったのだ。「忙がしそうね」とカボチャ頭は言うが、忙がしいのはエルヴィスの唄のためなのだ。(忙がしい)と思うと、またあの元帥の顔が目の先にちらついた。「キサス・キサス」の唄が大きく聞こえて、横で、

「熱を入れているヒトがあるんでシヨ？」

とカボチャ頭が言った。

「スペシャルはいないよ」

と洋介は言った。

「好きなヒトがありそうだわ」

とカボチャ頭がまた言った。ひょっと、洋介は（このカボチャ頭は、ラブしたいのではないか？）と思った。それなら（うるさいぞ）と思った。愛したり、愛されるなんて熱病にかかるようなことは（苦しそうで、嫌いだ）と思った。レコードがエルヴィスの「デキシード・ロックス」になった。カボチャ頭がうるさいことを言いだして頭へ来てしまったところなので洋介はほっとした。テンポにあわせて膝をゆすって、（この女生徒、つまらないことを言いだしたナ）と顔まで嫌な顔に見えてきた。ドアの所へ伊藤が戻って来た。のろ／＼こっちへ来てコッペを二個テーブルの上にぽんと置いて、すぐ、半分ちぎってかぶりついた。

7時頃までレコードをきいて洋介はみんなと店を出た。一人になって家の駅へ降りたがすぐ家へ帰っては勿体ないので家と反対の方へ歩いて行つた。行きつけの貸本屋で洋画の映画雑誌でも覗いてみよう、と歩いて行くと向うから佐藤が歩いて来た。格子の上衣でピンクのシャツ、コゲ茶のズボンは少し太すぎると思うが背が高いからよく似合っていた。

「よォ、行かないかい？」

と佐藤が言うので後に続いた。

「身体の子が悪くって、このところ工場を休んでるよ、あしたからまた出るんだが」

と佐藤は言って、

「ここが、いかれてるよ」

と胸を叩いて見せた。どこが、どんな風に悪い病気なのか洋介は知りたくもないが佐藤は自分の病気を説明するのだ。(嫌だな) と思った。そんな憂鬱なことは聞くだけでも不愉快だった。駅へ行くと、

「銀座へ行こうよ」

と佐藤は、地下鉄までの切符を二人分買った。

銀座茶廊で唄を思う存分きいた。だが店を出るとすぐ物足りなくなってきた。もっと身体が疲れる程聞きたかったので帰りにまたあの店へ寄ってロカビリーを聞いて12時頃家へ帰った。親父が起きていれば、「泥棒みたいだな、夜中に帰って来て」とまたお説教されるのだが、みんな寝ているらしいのでそっと家へ入りこんだ。寝床についたらさっきまでのことがぼーっと浮んできた。銀座のネオンが巨大な宝石の様に臉の裏に現れたり、帰りにあの店で思う存分ロカビリーを聞いて、「これで、死んでもいいよ」と胸を病んでいる佐藤が言ったことを思いだした。思う存分エルヴィスの唄を聞くと洋介も(死んでもいい)と思った。身体中が満足したので、あの元帥の時間にもこれからはサボらないでいようと腹をきめた。元帥の時間がどんなに苦しくても時間だけは出席しようと洋介は元氣をつけた。

次の金曜の元帥の時間に洋介はサボらなかった。授業が始まったが前の時間に出ていなかったのですっぱりわけがわからなかった。数学は苦手の上に、サボったのだから尚更つまらなかった。つまらないのを洋介は我慢していた。時間さえたてばそれでいいのだと思った。洋介は肩をいからせて動かないで苦痛の時間をこらえていた。元帥のシャベっている声が、響いているだけで訳が判らないのは、前の時間をサボったからだとききかかっていた。アクビが出そうになったので

（見られてはまずい）と口に手をあてて思いきり大きく口を開いて息を吐いた。早く時間がたてばいいと思つてゐるうちに元帥の声は遠くへ行つてしまつた。

ざわ／＼とまわりが騒々しくなつて洋介はハツとした。授業が終つたところだつた。

「青山洋介ッ」

と自分の名を呼ばれて洋介はドキツとした。

「あとで職員室へ来い」

と元帥に言われて（しまった！ カックンだな）と唇を咬みしめた。

放課後、職員室のドアの前に立つて洋介は（このまま、帰つてしまおうか）と思つた。だが、それでは、またあとが嫌なので我慢してドアを開けた。文句を言われても、聞いてさえいれればすぐ帰れるのだと、元帥の机の前へ進んで行つた。元帥のすぐ横へ立つて（早く怒られてしまつて）と思つた、（早く、この嫌な時がすぎてしまえばいい）と思つた。とにかく、一刻も早く帰れるには一刻も早く文句が終ればいいのだと思つた。元帥はなかなかこつちを向かなかつた。洋介が横に来てゐるのは知つてゐるらしい。少したつと、こつちは見もしないで、

「そこへかけろ」

と元帥は言つたが、洋介は立つたままであつた。（俺が悪かつたんだから）とよく判つてゐた。

元帥は机の上で何か書いていた。

「そこへかけていろ」

と、また言われたので洋介は腹立たして腰をおろした。元帥はほかの仕事をしているらしいので、とにかく災難からのがれたようにホツとした。

「お前、夜おそいのか？」

元帥はこっちは見ないで仕事を続けながら言った。

洋介は返事が出来なかった。喫茶店で遊んでおそく帰ったから居眠りをしたとは思えなかった。ロカビリーを聞いたから夜もよく眠れたのだ。あまり早く寢床に入ったりすると身体がだるいような不快な気持ちになってかえって眠れないのだ。居眠りをしたのは授業がつまらないから自然に眠ってしまったのだ。だが、そんな言いわけをしても元帥はわかってくれないだろうと思った。とにかく（俺が悪いのだから）と洋介は黙っていた。こんどはサボったところを勉強しよう、そうすれば少しは判って来るだろうと思った。とにかく言われることは判っているのだから言うだけ言ってしまう方がいいと思っていた。その時、元帥は仕事が終ったらしい。ガタンと洋介の方へ椅子をむけた。こっちを睨んで、

「青山、お前は警察でマークされてるだろう」

と意外なことを言った。ずっと前、三月も前、駅の裏通りで愚連隊に言いがかりをつけられて喧嘩をしたことがあった。相手は三人で洋介は一人だった。だが、あの時のことは洋介が悪かったのではなく、相手が悪い奴等で親達も警察でもよく判ってくれたことだった。それに、（あのことは、あれですんでしまった筈だ）と洋介は腹が立ってきた。元帥はあのことも俺が悪いと思っているらしいのである。今頃そんなことを言い出すのは（言いがかりをつけると同じだ）と思った。それよりも、殴られて怪我をした時のみじめな、あの時を思いだしたからだった。

（そんなことを言わなくても）

と洋介は頭に來てしまったので下をむいて我慢していた。黙っていると、